

しゆ ごと れい たん てい
守護霊探偵アンバー③

なつやす ぶん か さい あら てき
夏休みと文化祭と、新たな敵!?

こたにきょうこ
小谷杏子・作

ほし・絵



アルファポリスきずな文庫

Contents



プロローグ

しのびよるナゾの影

006

夏休み編

第1話 合宿へ行こう！悪霊にご注意？

007

第2話 解決？守護霊の聖地で元気チャージ！

075

文化祭編

第1話 ワクワク秋の祭典におおいそがし！

103

第2話 みんなで解決！新たな敵の正体は!?

241

エピローグ

最後は笑顔で！文化祭、おつかれさま！

296

あとがき

296



登場人物

どうじょう
じんぶつ

ベリル

あま つき まりん
天月海

あま つき らいと
天月光

しゅごれい
守護霊みならいが
しゅごれい
守護霊になるための
しけん しけんかん
試験の試験官。
ふいたん ねこ
普段は猫の姿。

らいと ふたご ねと
光の双子の弟。
あに ふたり ひとのみ
兄と二人一組で
しゅごれい
守護霊みならい
ターコイズの
サポーター。

どうがくねん
こはくと同学年の
せいとかいやくいん
生徒会役員。
できたい
敵対していたが
なかま
仲間になった
かいとう しやうたい
『怪盗ムーン』の正体。

さえ くさ さん こ
三枝珊瑚

うのちはや
卯野千颯

ジェットが
ひと ずかた
人になった姿。
ももとはウサギ。
まらん
海やはたと
おな
同じクラス。

み その
三園ほたる

しゅごれい
守護霊みならい
ジェットのサポーター。
おな
海と同じクラスの
せいとかいやくいん
生徒会役員。

こはくのクラスの
たんいん せんせい
担任の先生。
たんどう かちりか
担当科目は理科。

ざ えき
佐伯こはく

ちゅうがく ねんせい な あいびょう
中学2年生。亡き愛猫ルビィが
しゅごれい
『守護霊みならい』となったため、
かつどうちゆう
サポーターとして活動中。
なや ほう
悩んでいるひとを放っておけない
がっこう しえんぶ ぶ ちやう
学校支援部の部長。

ねこ みや
猫宮ルビィ

しゅごれい
守護霊みならいになったルビィ。
れいかい
霊界のアイテムでこはくと
おな どし おんな こ
同い年の女の子に。
げん き
元気いっぱいな性格。

プロローグ　しのびよるナゾの影

深夜二時半ごろ。この時間をむかしの言葉で、丑三つ刻という。

ひとつの「影」が、まっくらな山をのぼっていた。

坂をのぼるたび、金色のヒカリがゆらめく。ここ最近の夏は、夜も暑い。しかし、この山には、ジツトリとした熱気はどこかない。

人が数人ならんで歩ける幅の一本道から、広い場所に出る。やぶのおくに大樹があった。近くには、フシギな香りをはなつ温泉があり、そのむこうでは、滝の音がする。

「影」は周囲を見回したあと、手に持っていた金色のヒカリを大樹におしつけた。すると、それまでしずかだった大樹が、風にふかれてザワザワ音を立てた。

金色のヒカリが大樹へ、すいこまれる。すみきっていた空気が、にごつていく。「影」は、その様子を、しずかにながめていた。

夏休み編第1話　合宿へ行こう！　悪霊にご注意？

1. 夏休み、まんきつ中！

あらしのような球技大会と期末テストが終わると、夏休みがはじまった。学校が楽しくなってきたわたしにとって、夏休みはちよつとたいくつ。

それに毎日、テレビニュースで『今日も例年の最高気温をこう新しかったです！』と言われたら、外に出るのがイヤになっちゃう。ルビイもネコのすがたで、くつろいでいた。

「はあり、毎日暑いから、お店で親愛のカケラあつめでいいや〜」

「ルビイは店番しなくていいから、のんびりできるけど、わたしはそうじゃないのよ」
一階の雑貨屋さんのレジで、わたしはイスにすわったまま返す。

お客さんはいない。お父さんは休けい中。お母さんは、外で水まきしている。

「こはくも店番だけど、のんびりしてるじゃない」

それはそうだけど、お客さんがきたら、こんなだらけたすがたは見せられないよ。

あーあ、ルビイはいいなあ。ネコのすがたのときは、みんなから見えなくなるんだもん。

あ、そろそろ自己紹介するね。わたしは佐伯こはく。中学二年生の守護霊サポーター。守護霊サポーターってなに？　って思うよね。

実はこの春、飼いネコのルビイが、守護霊みならいとして帰ってきたの。ルビイは立派な守護霊になるため、試験を受けて、わたしはそのサポーターをしてる。人を悪霊から守ったり、お願いをかなえたりしてるんだ。

横でダラダラする、赤い毛並みのネコがルビイ。いつもは人間すがたで元気に活動してる。でも、夏休みからは、ネコのすがたでゴロゴロしていた。毎日暑いし、夏バテかな？

「そういえば、ルビイ。二次試験は、いまだどんなカンジなの？」

二次試験は、いろんな種類の親愛のカケラをあつめなきゃいけない。学校がある日は、校内であつめられたんだけどね……

「たしか、九月の最後の日が二次試験終了の日だね」

そう言つて、ルビイは霊界のタブレットを見せてくれた。

「あ、見て、こはく！　ルビイの砂時計はそろそろ満パイになるよ！」

じゃあ、このままにもなければ、二次試験も無事に合格できそうなんだ。よかった。

「九月末かあ。そのころには文化祭もあるね」

そう言つと、ルビイは「わーい」と言いつつ、なんだかやる気がなく、だらんと足をのばした。そのままわたしの頭の上で丸くなる。これは、寝ようとしてるよね……？

「ねえ、ルビイ。寝ないで。なんかお話しして。わたしもヒマで寝ちゃいそう」

「うーん、お話し……あ、そうだ、人間界に守護霊の聖地があるんだって。そこに行けば元気になるし、憑依したときの力が、いまよりもっと強くなれるみたい」

「へえ。どこにあるの？」

「山の中。聖なる力がわく温泉とか、力のみなもとの滝とか。とつてもキレイな場所」

わたしは温泉を思いうかべた。天空に大きな滝や湯気がモクモク立ちのぼるイメージ。そんな場所があるのかな？　でも、憑依したときの力がアップするのは、いいことだね！

「ベリル先生もたまに聖地へ行って、元氣チャージするみたいだよ」

ベリル先生っていうのは、ルビイを守護霊みならいとして育てた先生。ルビイとおなじ

ネコだけど、人間のすがたにもなれる。とつても優しいオトナのお兄さんの。

「そっかあ。ベリル先生が温泉に入る様子が想像つかないなあ。その場合、人間のすがたで温泉に入るのか、ネコのすがたで入るのか、どつちなんだろうね？」

「人間でもネコでも、想像がつかないよね」

ルビイがクスクス笑いながら言う。

「あ、でも、三枝先生も言ってたけど、外でハダカになったら、つかまつちやうんだよ」

ルビイはネコなので、人間の「ふつう」にうとい。一応変質者の話に絡めて注意した。

ちなみに、三枝先生はわたしの担任の先生。理科担当の女性教師で、ほんわかやさし

い笑顔と、寝ぐせが特ちよう的。それと……

「三枝先生といえば、いつも持つてるマスコット人形、ルビイは知ってる？」

「オトナなのにお人形がスキなんだね」

「オトナでも、お人形がスキなのは、ヘンじゃないよ。でも、それがなんというか……」

親指くらいの小さなマスコットなんだけど、形がアメーバみたい……理科でならつた

微生物っぽいもの。ルビイはわかんないだろうから、説明がムズかしい。

考えてるあいだに、ルビイは小さく丸まった。ああ、寝ちやう！
すると、とつぜんお店のドアがあった。

「いらつしやいませ！」

あわてて立つと、頭上のルビイが「みやっ！」と、びっくりしてころがった。

入ってきたのは、顔がそっくりな双子の男の子。同じ部活の天月兄弟だ。やさしそうなのが天月光くん、ちよつといじわるそうに笑うのが天月海くん。

「おつかれさま、こはくちやん」

「よう、ひさしぶり」

「わあ！ ふたりとも、ひさしぶり！」

思わずテンションがあがつちやう。ルビイも
ピョンつと、ふたりの前に飛び出した。

「どうしたの!? ふたりともこんなとこまで」

「ぼくもいるよ！」

双子のうしろから、小さな男の子が顔を見せ



る。小学四年生くらいの身長で、頭には青い飛行帽と大きなゴーグルをつけていた。プクプクしたほっぺがかわいい。

「えつと……ふたりの弟？」

ルビイが、首をかしげながら聞く。わたしは親せきの子かなって思ったけど。すると、光くんと海くんは顔を見あわせて笑った。

「この子、ターコイズだよ」

光くんが言う。わたしとルビイは、目をパチパチさせた。

「ええー！つ！？」

ターコイズ、通称ターちゃんは、ふたりの元ペットのインコ。ルビイとおなじく守護霊みならいで、親愛のカケラをあつめてるの。それがいま、人間の男の子になってる！

「ついこのあいだ、一次試験を合格したんだ」

光くんが、ターちゃんの頭をなでながら言う。海くんもあとをつづけた。

「そうそう。だから今日は、そのおひろめ。どうだ、ルビイ、うちのターは優秀だぞ！」

「みやー！ ライバルがふえたあ！ ルビイ、メラメラしちやう！」

ルビイは目を光らせて、にらむみたいにターちゃんを見る。ターちゃんは、光くんの手をつかんだ。

「ぴい、やさしくお願います……」

すると、光くんがおだやかに話をそらす。

「今日は、おひろめだけじゃないんだ。もし、よかつたら来週、いつしよに旅行に行かない？」

「え？ 旅行？」

「うん。ターのお祝いと憑依特訓をかねて、支援部の合宿ってカンジで。どうかかな？」
そのおさそいに、わたしとルビイはおどろいて顔を見あわせた。くわしく聞くと、双子のおじいさんとおばあさんのおうちが、となりの県にあるらしい。

わたしもルビイも、すぐに「行く！」と答え、さつそく来週の旅行が決まった。

あわててじゅんぴを済ませ、なんとかお父さんを説得して、当日をむかえた朝。
お母さんの車で、わたしとルビイは待ちあわせの駅前まで送ってもらった。

「ルビイちゃんっていうんだっけ？ こはくと仲よくして仲よくしてくれてありがとねえ」

車の中で、お母さんがルビイに話す。人間すがたのルビイは、お母さんの目でも見えるけど、元ペットのルビイってことはナイショ。仲良くなったお友だちがぐうぜんおなじ名前だった、つてことにしてる。

「えへへー！ こはくとはずつと仲よしなの！ です！」

ルビイは元氣よく答えた。お母さんはあやしむことなく「そっかあ」と笑っていた。

長い山道をとおつて、ようやくとなりの県の市街地に出る。待ちあわせしてる駅は、小さくてふるい木造建て。駅前にバス停があり、すでに光くんたちの車が待っている。

わたしたちは、天月家の車まで行った。運転席からオトナの男性がでてくる。

背筋がピンとしていて、真夏なのにシャツとスラックスという、マジメそうな人だ。

「今日は、よろしくお願ひします。天月です」

双子のお父さんが、ほほえんで頭を下げる。笑うと、双子に似てるなあ。

「どうも、佐伯です！ 天月先生の本、拝読してます！ お会いできて感激です！」

お母さんが、前に出て楽しそうに話した。

お母さんは古代遺跡が好きで、遺跡発掘のボランティアもしてる。そして、双子のお父さんは大学の先生。考古学っていう学問を担当してるんだって。気が合いそうだね。

「おじょうさんは、きちんと責任を持っておあずかりします」

「とんでもないです！ お世話になります！」

そんなあいさつのあと、わたしたちは双子が乗るワゴンへ移動した。

エアコンが入った八人乗りの車には、助手席に海くんと、その肩にインコすがたのターちゃん。うしろの席には、光くんがいた。これにルビイが、わたしを先におしこむ。

「やあ」とかろやかにあいさつする光くんの横にわたし、ルビイの順で乗る。「よう！」と、海くんが元氣よくふりかえる。ほどなくして、双子のお父さんが運転席に乗った。

「今日はよろしくお願ひします！」

わたしは、あわててお父さんにあいさつした。すると、お父さんもおじぎする。

「こちらこそ、いつもふたりがお世話になってます。僕は送りむかえだけですけど、楽しんでてもらえたらうれしいです」

「父さん、かたいつてばー！」

すぐに海くんが、からかうように笑う。光くんも前のめりになって言った。

「父さん、マジメすぎだよ」

すると双子のお父さんは、困ったように「そうかなあ」と言った。

「ふふふつ！ 双子のパパ、かつこいいよねー。さすが双子のパパってカンジ！」

実は双子のお父さんに会うまで、わたしはちよつと不安だったんだよね。移動中にはぎやかだった。

天月兄弟のお父さんは、仕事でいそがしくて、あまり家にいない。そしてお母さんは、病気がちで入院中。そんな中、ペットのターちゃんも死んでしまって、双子はとても落ちこんでいた。それが春のこと。

「こはくちゃん」

ふいに、光くんがわたしにしか聞こえない声で言う。

「最近、父さんもすこしは休んでくれるようになったんだ」

「そうなんだ？」

「うん。それに、今日（きょう）のことは母さんが計画（けいかく）して、父さんにたのんでくれたんだ」

うれしそうに言う光くんに、わたしは心から安心した。天月家、調子いいみたいだね。車は青々とした田んぼが広がる道（みち）を走（は）っていき、山のふもとまで行く。ジャリ道（みち）に入り、タイヤがガタガタゆれる。

やがて、大きくひらべつたい日本（にほん）家（か）屋（や）が見（み）えてきた。木造（もくぞう）の壁（かべ）にどつしりとしたかわら屋根（やね）。お庭（にわ）も広くて、力強（ちからづよ）くのびるマツの木（き）が植（う）えられて、花（か）だんもある。

車が停（と）まると、自動（じどう）ドアがひらき、光くんが先（さき）に外（そと）へ出（で）た。

「足元（あしもと）、気（き）をつけて」

「うん、ありがとう」

光くんに言（い）われ、気（き）をつけて車（くるま）をおりる。そのあと、ルビイがピヨンと飛びおりました。

「やつとついたらぜ〜」

助手席（じよしゆせき）からおりてきた海くんが、つかれた声（こゑ）で言う。

「光（ひかり）、海（うみ）、荷物（にもつ）を下（お）ろすから、てつだつて。こはくさんたちは、日（ひ）かげにどうぞ」

双子（ふたご）のお父（とう）さんが声（こゑ）をかけてくる。わたしはその言葉（ことば）に甘（あま）えて「はい！」と返（へん）事（じ）した。

言（い）われたとおり、日（ひ）かげのある玄関（げんかん）先（さき）までむかう。

「大きなおうちだねえ。さすが、お金持ち」

ルビイがしみじみ言った。本当にそう思う。さすが、お金持ち！

「おまたせしました」

大きなバッグを持ったお父さん。そのうしろに光くんたち。玄関の引き戸をガラツとあけて、お父さんが「ただいま帰りました」と言う。

玄関は横長に広くて、くつがいつばいならべられそう。中は長いろうかがつづいてる。「ねえねえ、こはく、あれなに？」

ルビイがわたしのそでを引っぱる。ルビイが見てるのは、玄関わきにたたんで置かれた、黒と白のちようちんだつた。

「お盆のちようちんだよ。玄関につるして、ご先祖さまをむかえる目じるしにするんだ」すぐに光くんが教えてくれた。

お盆は、八月のまんなかにおこなわれる行事。亡くなった人を思い、なぐさめるためにお祈りすることを『弔う』っていうんだつて。

「僕は家族四人で、お盆をすごしたよ。それで、むかし飼ってた金魚とか思い出した」

光くんはすこしにごしながら言った。そう言われたらわたしも、家族でかんたんにお墓まいりだけやったなあ。ようやくルビイもわかったみたいで、手をポンと打った。

「なるほど。それがお盆なのね！ お墓まいり、ルビイもネコのままで行つたよ！」

そして、わたしたちは顔をあわせて「ねー」と言う。

光くんは一瞬だけおどろくと「そっか」と笑った。その顔はなんだかうかない。

どうしたんだろうと聞くより先に、ろうかのおくから、おばあさんが「いらつしやーいと、小走りでやつてきた。手には白いらくがんを持っている。」

「ごめんなさいね、お盆のかたづけをしたのよお。どうぞ、入つて入つて！」

「おじやましませーす」

海くんが真っ先にあがり、光くん、わたし、ルビイ、双子のお父さんの順番で入った。

ろうかをとおり、リビングへ。広々とした部屋にはたたみが一面にしきつめられ、その中央にどっしりとした真四角の座卓がある。

おうちの広さに、わたしとルビイがポカンとしていると、縁側のむこうから、おじいさんが顔をにゅつとのぞかせた。

「おお、きたかい」

「なんだ、じいちゃん、そこにいたのかあ」

海くんはひとなつっこく言う。わたしとルビイは、すこしきんちようする。

「ほら、みんなあつまつて。お茶どうぞ」

おばあさんが台所から、グラスとヤカンを持つてくる。おじいさんも「はーい」と言つて、縁側からあがった。座卓にそれぞれつき、やつと落ちついて対面する。

「こちら、光と海のお友だちの、こはくさんとルビイさんです」

双子のお父さんが紹介してくれ、わたしとルビイは同時にペコつとおじぎする。

「はじめまして。よろしくお願ひします……!」

わたしは、きんちようして、声がうらがえりそうになりながらあいさつした。

おじいさんとおばあさんは、ニコニコして「よろしくね」と言う。やさしそうな人たちで、ホツとひと安心。すすめられた麦茶を飲む。つめたくておいしい……

そのあいだ、双子のお父さんが、おじいさんたちにかるく話し、立ちあがった。

「じゃ、光、あととはたのむよ。海、めいわくかけちやダメだからな」

「はーい」

双子は声をそろえて返事する。そして、お父さんはわたしたちを見た。

「こはくさん、ルビイさん、楽しんでくださいなね」

「はい! ありがとうございます!」

「お仕事、がんばってくださいーい!」

ルビイが元氣よく手をあげながら言う。お父さんは、光くんそっくりなほほえみを残して、おうちを出ていく。ほどなくして、車のエンジン音が遠ざかっていった。

「……さて、光、海」

とつぜん、おばあさんが言う。

「おばあちゃんたち、ちよつとかたづけをするから、お外で遊んできてちようだい」

「え! 手伝うよ?」

すぐさま光くんが立ちあがる。海くんは「えー」と顔をしかめた。

「いいのいいの。こはくちゃんたちを案内してあげなさい。ほら、近くにワンダフルプールつてのができたから、行つといで」

おばあさんが言うとおじいさんがスツと二枚のチケツトを出した。

「ペアチケツト。四人で使える。新聞屋さんにもらったんだ」

「おおー！ じいちゃん、ありがとう！」

すかさず、海くんがはしゃぐ。光くんはチケツトを受け取り、わたしたちに苦笑した。

「じゃあ、行ってみる？」

「行く！」

わたしとルビイは、声をそろえて答えた。

ワンダフルプールは、屋内にいろんなプールがあるレジャー施設。プール以外にも温泉やレストラン、ゲームセンターまで入ってて、夏は観光客で大にぎわいなんだとか。

実は、わたしのお母さんが事前にこの周辺の施設をチェックしてて、水着を持たせてくれたんだよね。さすが、お母さん！

場所は、ここから徒歩で十五分ほど。そう遠くはないんだけど……八月なかばの猛暑の中、歩いていくのは大変だった。

全員、汗だくで大きな門をくぐり、ガラスのひらべつたい建物に、なだれこむようにして入った。光くんが代表して、受けつけの人にチケツトをわたす。

「四名様、プールのご利用ですね。更衣室はこちらでございます」

「ありがとうございます」

そうして受けつけを済ませたとたん、海くんがさげんだ。

「あつちいぜ！ さつさとプールだ！ プール！ プール！」

光くんを引っばつて男子更衣室へ走る。

「こはくちゃん、あとでねー！」

「はい！ ほら、ルビイ、行くよ！」

わたしはルビイの手をひいて、女子更衣室へむかった。

けっこう人がいて、なんとかロッカーに荷物を入れた。

「へんしーん！」

わたしが着がえている横で、ポンツと音が鳴る。ルビイのかっこうが水着にかわった。

ピンク色のフリルがついた、赤いワンピースの水着になったルビイは、髪型までツインテ

ールにしている。

かわいいけど、こんな人前で、守護霊の力を使っちゃダメでしょ！ だれにも気づかれなかったからよかったけど。

わたしの水着は、オレンジと黄色のチェック模様の水着だけど、おへそが見えるタイプのもの。ちよつとはずかしいので、プール用のパーカーを上に着る。

「こはく、はやくはやくー！」

「ああもう、待ってよ、ルビィー！」

ろうかをとおり、プールの入り口へ行くと、ルビィが目をキラキラさせていた。

「すつつつごおーい！」

岩に見立てたウォータースライダーが、中心にドーンとあり、その周囲に流れるプールがある。ほかにも小さい子ども用の浅いプールや、ふん水広場も。体育館よりも広いプールサイドには、ベンチやパラソル、テーブルがあり、焼きそばやかき氷の出店もあった。すでに流れるプールにいた海くんが手をふつてくる。海水浴用の水着で、迷彩柄のパンツが海くんらしい。

「おい！ おまえら、おせえぞ！ ルビィ、スライダーのどこ行こうぜ！」

「わーい！ やるやるー！」

すぐにルビィが、いきおいよく走る。

「あ！ コラ！ ルビィ、走っちゃダメ！」

プールサイドは走っちゃダメなんです！ って言っても聞いてくれない。

「ごめんね、海のやつ、こういうところが大好きだから」

光くんが、となりにきて言う。シンプルな深い青の水着だ。その横に、子どもすがたのターちゃんが、大きなうきわを持っている。ふたりは手をつないでて、兄弟のよう。

「あれ？ ターちゃんのチケット、なかったよね？」

「ターは人間じゃないから、おおめにみてよ」

いたずらっぽく笑う光くんは、わたしはなにも言えない。まあ、いつか！

「そういえば、ルビィちゃんって、ネコなのに水が平気なんだね？」

ターちゃんをうきわにのせながら、光くんが聞く。ルビィは、海くんとウォータースライダーのてっぺんへ行き、とつても楽しそうにすべりおりにいた。

「うん、学校でプールの授業があったでしょ？
最初は水をこわがってたんだけど、すっかり
なれたみたい」

「すごいなあ。もう人間みたいだね」

そんな話をしながら、わたしたちはしばらく
プールで遊んだ。

その後、てきどに休けいをささむ。プールサ
イドのベンチにすわって、ハイテンションな海

くんやルビイたちをながめた。ターちゃんも、プールになれてきたら、うきわでプカプカ
流れる。

「こはくちゃん、コーラとオレンジジュース、どっちがいい？」

飲みものを買いに行っていた光くんが、缶ジュースを見せて言った。

「ありがとう。じゃあオレンジで」

「はい、どうぞ」

そう言うとき光くんは、わたしのなりにすわった。なんとなく、ドキッとしてしまう。
学校では、光くと別クラスだから、プールの授業で会うことがない。はじめて見る光
くんの水着すがた。いつもはまつすぐな髪も、ぬれたからか、クシユツとしていつもと
フインキがちがう。

あれ？ 思えば、学年で一番かっこいい光くと、こうして夏休みに会って、プールに
行って、おとまりして……って、こんなところを、学校の子に見られたらマズい！

「ん？ あの子……」

ふいに光くんが言う。わたしは、ビクッと肩をふるわせた。まさか、知り合いが!?

「ああ、やつぱり。三園さんに似てない？」

光くんが指さす方向に、ボブカットの女の子と、長い黒髪をポニーテールにした女の子
がいた。どっちもビキニの水着で、オトナっぽいフインキ。

まちがいない、三園ほたるちゃんと、卯野千颯ちゃんだ。おなじ学校の子だけど、ふた
りにはバレてもだいじょうぶ。

なんとって、千颯ちゃんは、ジェットつという名前の守護霊みならいだし、ほたるちゃ



んはそのサポートだからね。先月の球技大会をめぐる、ポルターガイスト事件は、ふたりのおかげで、無事に学校のみんなを守る事ができたの。

わたしたちの視線に気づいたのか、ほたるちゃんたちがやってくる。

「まさかとは思ったけど、やっぱり佐伯さんと天月くんじゃない」

「ぐうぜんだね！ こんなところで会うなんて、びっくりした！」

ほたるちゃんは苦々しい表情でうなずくけど、いつものことだからなれちゃった。

「君がいるということは、ルビイもいるんだな？」

「うん。海くんとターちゃんといっしょに、流れるプールで遊んでる」

ジェットは「ふーん」とつまらなそうに、流れるプールを見た。ほたるちゃんは「海くん」という名前に反応し、顔を赤くする。

「フン！ あのおバカさんもいるのね。それがわかってたら、プールなんかこなかったわ」

赤い顔のまま、ツンと言うほたるちゃん。うーん、すなおじゃないなあ……

「そうだ、ふたりもいっしょに遊ばない？ 夕方くらいまで、ここにいる予定なんだ」

光くんが気を使うように言う。でも、ほたるちゃんは、ツンとしたままだった。

「あいにく、わたしたちはそうヒマじゃないわ。守護霊の聖地つとこを探して、ジェットを休ませるの。そのために、この近くのホテルまで来たんだから」

「えっ！ ほたるちゃんたち、守護霊の聖地を知ってるの？」

思わず大声で言うと、遊んでいたルビイたちが気づいた。こっちへやってくる。

「あー、ほたるだ！ やっほー！」

「あいかわらず、君はのんきだな」

すぐさま、ジェットがあきれて言うので、ルビイは「のんきじゃないもん！」と怒る。

「ほたるも遊ぼうよー！ ねえねえ、遊ぼうたらー！」

ルビイがじゃれつく。ほたるちゃんは、すこし気持ちが悪くなったのか「うーん……」とな

やんだ。でも、ジェットがルビイをおいはらった。

「わたしたちはいそがしいんだ。あっちに行け」

「じゃあなんで、プールにいるのよー！ 遊びにきたんじゃないのー!？」

「うるさい！ ダメなのはダメだ！」

ジェットが怒る。まあ、これもいつものことで、わたしたちは「またはじまった」とあ

されてしまう。

「とにかく、あなたたちと遊ぶ気はないの。じゃあね」

パイッとそつぽをむくほたるちゃんは、ジェットの手を引っぱってどこかへ行く。

ああ、また意地はって……。引きとめようと手をのばすと、それまでだまつていた海くんがぶあいそうに言った。

「ほつとこーぜ。ムリしてさそうことないだろ」

ほたるちゃんの気持ちに、いっさい気づいてない海くん。わたしと光くんは、同時にためいきをついた。

2. お楽しみのは、特訓です！

プールでたくさん遊んで帰ると、おじいさんとおばあさんがごちそうを作って、待つてくれていた。山菜とササミの天ぶら、トマトとズッキーニのいためもの、ナスとひき肉のみそいため、やきとうもろこし、まつ白なお米。

野菜があまくて、とつてもおいしい。食べる手が止まらなかった。

ルビイはどうか？ となりを見ると、むちゆうで食べていた。

食べ終わったあとは、わたしと光くん、あとかたづけを手伝う。ルビイと海くん、夕ーちゃんは遊びつかれたのか、居間で寝ころんで休けい中。

「そうだ、光。花火を買つといたんだけど、庭で遊ぶ？」

洗いものをするおばあさんが、思い出したように言う。

「わー！ ありがとう、おばあちゃん！」

お皿をふく光くんが、うれしそうに笑った。

「こはくちゃん、いっしょに花火しよう！」

「オレもやるー！」

海くんも、うしろからわりこんできた。こういうときだけ、元気になるんだから！

「それなら、かたづけ手伝ってよ」

わたしが言ううと、海くんは「えー」と言つて、イヤそうに肩を落とした。

「みんなでやれば早く終わるでしょ！」

おばあさんがピシャリと言う。たちまち、海くんの背すがピンと立った。

どうも、おばあさんにはさからえないみたい。海くんもお皿をふいて、たなに入れる。三人でやれば、あつというまに終わった。

「ルビイ、花火するよ！」

「はなび……？ 花火!? って、なに？」

うたたねしていたルビイは、おどろいて起きあがった。なんて説明しよう。すると、うしろから光くんが、花火セットを持ってきた。

「これだよ、ルビイちゃん。みんなで外で、パーツとやるんだよ」

「パーツと？ やったー！」

どうやら、これだけでわかったみたい。わたしたちはさつそく、縁側からお庭に出た。ターちゃんは起きないので、そつとしておく。

海くんがバケツに水をくんできてくれて、光くんが花火セットをあける。おじいさんが、ライターでろうそくに火をつけてくれたので、じゅんびばんたん！

まっくらな空に、ちりばめられた星がキレイな夜。花火の先たんを、ろうそくの火に近

づけると……パチパチと一気に火花がはじけた。シューッと、緑の火花がシャワーみたいにほとぼしる。

「キレイイ！」

ルビイが手をたいてよろこぶと、今度は自分がろうそくの火に、花火を近づけた。

「わっ、こわい！」

「なんだよ、ビビりだなあ、ルビイは」

手を引っこめたルビイを海くんがひやかす。両手に持った花火から、赤とピンクの花火をちらした。

光くんも黄色の花火を持って、楽しそうに笑っている。わたしは、こわがるルビイの手を持って、花火に火をつけた。あつというまに、赤い火花がパツとはじける。

「わ！ わあ！ わあー！ わあー！」

はげしくなる火花に、ルビイはちよっぴりこわがりながら、よろこんだ。

わたしも自分の火花をえらんだ。オレンジ色の火花がほとぼしる。

海くんは、火花をふりまわして、光くんを追いかけていた。

そうして、ひととおり花火を楽しんだあと、残っていた線香花火を取り出す。全員が輪になってしゃがみ、ほそくてやわらかいコヨリに火を近づける。最初に火がついたのは、ルビイのだった。

「わああ」

小さく赤い火がともり、パチッパチッと音を立てる。全員のコヨリにも火が付き、だれがさいごまで火が残ってるか、きそいあう。

わたしは光くんの横にしゃがみ、そつとお札を言った。

「光くん、さそつてくれてありがとうね。とつても楽しい合宿になりそう」

「よかった」

ほんのすこしの明かりの中、光くんの満足そうな笑顔が見えて、わたしまでうれしくなる。そのとき、おたがいの丸くふくらんだ線香花火の火がくつついた。

「あつ、ごめん！」

思わず、あわてて花火をはなそうとする。でも、光くんは「待つて」と言った。

「このままにしたほうが、長く火が残るよ」

光くんの言うとおり、しばらく線香花火は、ともりつづけた。ジッと火花を見つめる。うす暗い中でも、しつかりと光くんの顔が見える位置。こんなに近いと、わたしのドキがとどきそう。

「あつ、落ちちやつた」

目をつむつてると、光くんの残念そうな声があった。わたしは下をむいたまま目をあける。さいごの花火が、地面に落ちていた。そのやわらかそうな火はしばらく残り、その光景をわたしはしばらくわすれられなかった。

夜はたつぷりねむつて、朝はスツキリと目がさめた。

用意してもらった朝ごはんを食べる。目の前では、早起きの海くんがターちゃんを頭にして、牛乳を一気飲みしていた。

「海くん、早いねえ」

ウトウトしたままのルビイが、のんびり言う。

「あつたりまえだろ！ なにしにここまでできたとおもうてんだよ」

えっと、なにしにきたんだっけ？ そんなわたしたちに、海くんはためいきをつく。

「特訓しにきたんだろ！ わずれたのかよ！」

「そうだった！」

ルビイが目をパツチリあける。きのうの充実感のおかげで、真の目的をわすれてたよ。

「特訓するなら、ひとけのない場所だね。このうらの山の近くに、いい場所があるよ」

身じたくをととのえた光くんが、たくさんのふるい本をかかえて言う。

わたしは気になって質問した。

「それはなに？」

「この周辺のむかし話や伝承をあつめた資料だよ。守護霊の聖地つとところ、見つかるか

もしれない」

「えっ？ 守護霊の聖地、探すの？」

「うん。きのう、三園さんも言ってたし、この町にあるなら見てみたいし」

「でもそれ、ぜんぶひとりで読むの？」

すると、光くんは「うん！」と笑顔を見せた。わたしは、あきれて天井をあおぐ。

わすれてた。光くんつて、お父さんが考古学者だからか、古い遺跡とか歴史資料が大好きなんだよね。

「おい！ こはく、ルビイ！ 先に行ってるぞ！」

海くんが玄関先でさげふ。ああもう、あわただしいなあ！

わたしとルビイは、いそいで朝ごはんを食べ、かたづけをして身じたくをととのえた。

先に出ていった海くんたちを探す。お家のうらの草地で、すわって待っていた。光くん

は、こかげで本を熟読してる。暑くないのかな……

「あ、きたきた！ おせえぞ！」

「ごめん、おまたせ！」

「よし、それじゃあお手本を見せてもらおうか、センパイ？」

海くんが、いじわるな笑顔でためすように言う。ルビイはいどむように、うで組みした。

「ちゃんと見てなさいよ！ こはく、いくよ！」

「うん！」

ルビイがピンク色の羽うちわを出す。それを受け取ったわたしは、強く気持ちをこめて、

羽うちわを天にかかげる。

「憑依！」

ヒカリのつぶにおおわれ、体にスウツとなにかがはいつてくる感覚がする。つぎのしゅんかん、わたしのかつこうは、赤いワンピースすがたになった。

「おおー！」

海くんが感心する。ターちゃんは手をたたいた。

すぐにわたしとルビイは変身を解く。ルビイは「ふふん」と得意げに笑った。

「よし、オレたちもやつてみようぜ！」

海くんは、そう言つていきおいよく立ちあがった。ターちゃんも水色の羽うちわを出し、海くんがそれを受け取る。ここまでは、わたしたちの動きとおんなじだ。

「憑依！」

ヒカリのつぶが、羽うちわにあつまる。海くんが「おお！」とおどろく、けど……

「あれ？」

海くんのすがたが変わらないので、わたしたちは、あつけにとられた。海くんが、目を

つむつたまま聞く。

「憑依できた？」

「ううん。できてない！」

目をあける海くんとターちゃんは、残念そうに肩を落とした。そんなふたりに、ルビイがひとさし指をピンと立てて言う。

「憑依のコツはね、強いキモチなの！心をひとつにしなきゃ！」

海くんは「うーん……」と考えた。すると、ターちゃんがしょんぼり言う。

「いまのは、ぼくのじゅんびができてなかったよ。ごめんね、海」

「なるほど、オレとターの心をひとつに……先走ったかもな」

「もう一回、やつてみよう！」

ターちゃんも力強く言う。海くんは顔をあげ、ふたたび「憑依！」と唱えた。ヒカリのつぶが、羽うちわにあつまる。次はうまくいくかな？と思つたけど、できない。

それから海くんは何度も何度も「憑依！」と唱えたけど、ダメだった。

「もう！なんでできないんだよー！」



海くんは羽うちわを投げ出した。ルビイがあわてて、羽うちわをキャッチする。

「だいたい、なんで変身しなきゃいけないんだよ！」

「変身じゃなくて、憑依だよ！」

「うるせえ！ わかってるよ！」

ターちゃんがなだめるように、海くんの髪の毛を引っ張るけど、気づいてない。すぐケンカするんだから。止めようとあいだに入ると、まったく効果がない。

すると、それまでだまっていた光くんが本をパタンととじた。

「おい、海。そうすぐに感情的になるな」

「ああ!? だったら、光がやってみるよ！」

「僕はいいよ。ターと先に憑依するのは、海だって話しただろ」

「そうだけど！」

「もしかして、憑依するの、はずかしいの？」

光くんが悪気なく言う。これに、海くんは顔を真っ赤にした。

たしかに、大声で「憑依！」ってさげんで、なにも起きなかったらはずかしいよね。

「はずかしがつてちや、できるわけないでしょ！」

ルビイがもつともなことを言う。すると、海くんはすこし小さな声で「うるせえ」と言った。でも、すぐにしよぼんと、その場でうずくまる。

「ありや……ごめんねえ、海くん」

ルビイが、海くんの顔をのぞきこむけど無視される。ああ、いじけちゃった……

「こうなつたら、ほつとくしかないよ」

光くんの言うことはもつともだ。わたしも休けいしようよと、光くんの横に行く。

「守護霊の聖地、やつぱりこのへんにあるの？」

すると、光くんは「あるよ」とあつさり答えた。タブレットで写真を見せてくれる。

そこには、筆でえがかれた、ふるい絵があつた。江戸時代の絵かな？ 大きな木と、そ

の横にまつすぐ流れる滝、ほのかに湯気も細かくえがかれている。

「聖なる大樹は、大きなクスノキ。山の中腹に位置し、近づけば胸を打つような滝の鼓動

が聞こえる……」

「え、なに？ どういうこと？」

いきなり、ムズかしいことを言う光くんに、わたしは困わくした。

「この絵といつしよに書かれてた文章だよ。大きなクスノキは、たぶん、この山のどこかにある御神木だと思う……。あ、御神木っていうのはね、木を神様に見立てたものだよ」

そう早口で言いながら、タブレットで検索する。この周辺の木を記した記事が出てきた。

「ああ、やつぱり。大きなクスノキ、この山にあるみたい」

光くんがさしたのは目の前の山。この近くにあるのもそうだけど、見つけちゃう光くんもすごい。感心していると、光くんはタブレットを閉じた。

「よし、さつそく行つてみよう」

「え！ いまから!？」

「もちろん。善は急げつて言うしね。ねえ、海たちも行く？」

タブレットと本をリュックに入れながら、海くんたちに声をかける。でも……

「ダメだ、遊んで聞いてない」

海くんが怒りながら、ルビイたちを追いかけけるけど、あれはルビイとターちゃんに、ちよつかいかけられたからだと思ふ。

そのとき、ルビイがいつしゅんだけわたしを見て、ウインクした。なんだろ？

「僕、行ってみるけど、こはくちゃんはついてくる？」

「え？ えーつと……」

わたしは光くんと海くんたちを、こうごに見た。ルビイが、さらにウインクする。これは『光くんといつしよに行つて』という合図？ そういうことなら……

「わかった、行く！」

山の入口に足をふみ入れると、世界が変わったように、空気がひんやりしていた。背中では、ジリジリと太陽の熱を感じるのに。フシギだなあ。

「この山は、おじいちゃんの家のものじゃないんだ。ふるい時代から、ずっとあつて、この地域を見守つてるらしいよ」

光くんが声はずませて言う。

「小学生のときの夏休みなんか、ここにきたら、海といつしよに探検してたけど、まさかここに守護霊の聖地があるなんて知らなかったなあ」

たくさんの木や草がいつばい生えている山道は、意外と手入れがされていて歩きやすい。でも、一歩わきへされると、急斜面になっている。高いところまでのぼつたら、気をつけないと。服装をスニーカーとズボンにしてよかつた。すべてころんだら、大ケガしちゃうし、いそうだもん。

しばらくのぼつた先に、石段があつた。石をけずつて作られたものじゃなく、そのへんにあつた石をつみあげたような石段。でこぼこしてたり、段差が高かつたり低かつたりで、のぼるのが大変だ。

光くんは山になれてるみたいで、スイスイのぼつていく。

「このへんまでは、きたことがあるんだ……つて、こはくちゃん、だいじょうぶ？」

「うん、だいじょうぶ」

「ごめん、はやく歩きすぎたね」

おくれるわたしのもとに、光くんが、あわててもどつてくる。手をさしだされた。

「手、つかんで」

その言葉はとても自然で、わたしはとまどつた。えーつと……

夏休み前までの光くんは、わたしにふれるのもイヤそうだった。

それなのに、ここ最近(さいきん)は積極(せつぎやく)的な気(き)がする。わたしと過(す)ごすこと自体(じたい)にはなれてきたみたいだったけど……なにかおかしい……？

あ、そっか。いまの光くんって、ムーンライトに憑依(ひょうい)されたときの光くん(らいと)にそっくりなんだ！

わたしは、まじまじと光くん(らいと)の目(め)を見つめた。

「こはくちゃん？ どうしたの？」

「いまの光くん(らいと)、本物(ほんもの)だよね？」

光くん(らいと)は「えっ!？」とおどろいて、手(て)を引(ひ)つこめた。

「だって、なんか、きのうからの光くん(らいと)……ちよつとヘンだもん」

「ヘン？ まさか、そんなわけないよ」

わたしはなんと言(い)ったらいいかわからず、言葉(ことば)をにごした。すると、光くん(らいと)がむくれる。

「僕は本物(ほんもの)だよ」

「そ、そうだよね、ごめん」

あーもう、わたしのバカ！ 光くん(らいと)と気(き)まづくなりたくないのに！ でも、光くん(らいと)だつて、なにかをかくしてるところあるし……

『光くん(らいと)、なにかわたしにかくしてることない？』

部室(ぶしつ)で聞いてみたとき、光くん(らいと)はあわててた。いまはふたりきりだし、気(き)まづくなりたくないし、思(おも)いきつて聞(き)いてみよう。

「ねえ、光くん(らいと)。このまえ、部室(ぶしつ)で話(はな)したときのこと、おぼえてる？」

光くん(らいと)はふりかえり、キョトンとする。

「いつの部室(ぶしつ)で？」

「ほら、夏休み(なつやすみ)前の……ポルターガイスト事件(じけん)が終わ(お)ったあとの」

「毎日(まいにち)いつしよにいたから、どの話(はなし)だったかわかんないよ」

光くん(らいと)は困(こま)ったように言(い)う。ダメだ……ぜんぜん話(はなし)がかみあわない！

わたしはためいきをつき、光くん(らいと)の前(まえ)に行(い)こうと早足(はやあし)になった。それでも追(お)いつけない。

「え、こはくちゃん？」

「なんでもない……」

「でも」

「なんでもないよ!」

思わず大きな声を出したしゅんかん、なにかにつまずいた。なんでこんなときに! 「こはくちゃん!」

「だ、だいじょうぶだから!」

手をのばす光くんに、わたしは強い口調になってしまった。光くんが「ごめん」と、落ちこんだ顔をしてしまう。

そんな顔させるつもりで言ったんじゃないのに。ダメだな、モヤモヤしちゃう。

わたしは、服についた土をはらった。そのとき、足元をなにか黒いものが横切る。

「え?」とちいさくつぶやくと、光くんがすぐに「どうしたの?」と聞く。

「なんか、いま……黒い物体がいたんだけど、見た?」

光くんは首をかしげて「いや」と言った。

気のせいかも。イヤだな、わたし。へんなこと言っつて、気を引こうとしてるみたい。

「ごめん、見まちがいかも……じゃ、ない!」

顔をあげて、ギョツとする。

「光くん! 肩、肩になにか、いる!」

わたしのするどい声に、光くんはすぐに肩を見た。黒い物体——見まちがいじゃなかった! 光くんの肩に、ナゾの黒いものがある!

大声を出したら、ソレはサツと肩から飛びおりました。足元に落ちる。

「うわっ! なんだこれ!」

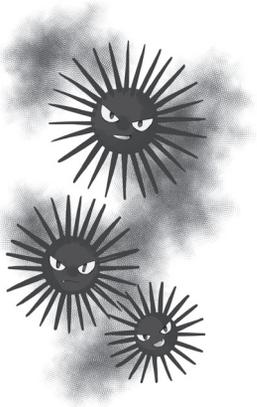
光くんが下をむき、おどろいてさげんだ。黒いわた毛が、たくさん足元にいる。

モコモコとしたわた毛は、どれも丸い形。サイズは手のひらにおさまるくらい。それが、わたしたちの足にまとわりつく。

「ぎやつ!」

山の上からどんどん黒いわた毛がおりてきて、あつというまに逃げ場をうしなった。

「こはくちゃん! 気をつけて!」



光くんがわたしの手をつかむ。わたしも、なりふりかまわず、光くんの手をにぎった。でも、黒いわた毛に取り囲まれ、わたしと光くんの手は、あつけなくほどけた。

黒いわた毛にふれると、かるい静電気のようなビリツとした痛みがある。悪霊だ……！
「光くん、このわた毛、悪霊だよ！」

「なんだって!? くっ……」

大量のわた毛に飲みこまれる。立っているのがやつとで、たおれないようにふんばる。どうしよう。光くんはムーンライトに憑依されていた後遺症があるから、悪霊に近づくと具合が悪くなっちゃう。

「うっ……」

わた毛が頬をかすめ、小さな切り傷のような痛みを感じる。ルビイ、たすけて！

首からさげていたペンダントの琥珀石をにぎった。これは、ルビイとつながるキズナそのもの。どうか、ルビイにとどいて。

「こはくちゃん、僕のうしろにさがって！ 僕が、なんとかする！」

光くんがうでで顔を守りながら、ゆつくり前に出る。

「なんとかって、光くんは……！」

わたしの声は、わた毛の大群にかき消される。山の上から、こんどはゴウゴウと風のような音が聞こえてきた。まるで、入るなどでも言うように、とつ風がわたしたちの行く手をはばむ。

光くんが風よけになつてくれた。でも、このままだと、光くんもあぶない。

お願い、ルビイ！ 気づいて！ 強い気持ちをごめて、琥珀石をにぎる。

すると、とつぜんうしろから、甘い風がわたしの背中をなでた。同時に、黒いわた毛がワラワラとわたしたちからはなれ、ふき飛ばされる。このフローラルな香りは……

「なんだ、君たちだったか」

黒いワンピースがたのジェットが、羽うちわを持って立っていた。

3. フシギな悪霊

上へ追いやった黒いわた毛は、また山の上からコロコロとおりてくる。ジェットは羽うちわを大きくふって、悪霊をふき飛ばした。